

一 栄 谷 葛 の 私 見 異 見



を展開しており、参加の目的も座学で知識を増やすという以上に、講座を通じて農業に参画している消費者・市民どうしの協同活動やスマートフォン等の仲間づくり、コミュニティーの拡大をねらっている人が多いように受け止めた。したがって、講義を受講する以上に、自分や周りの紹介や仲間つ

本コト十一の6月5日号で書いたように、本年3月に世田谷区で「農あるまちづくり講座」N世田谷を開講したが、先の6月27日に無事に終了した。月2回、第二・第四火曜日の午後7時から8時半まで、消費者・市民を対象に農業やまちづくりに関した講義を行い、残った時間で意見交換等を行ってきた。

定員20名に対し、申し込み締切を間近にして、あとという間に20名を超え、あわてて参加者が29名になってしまったことに象徴されるように、本講座に対する消費者・市民のニーズは想定以上のものがあり、またきわめて熱心を受講いただいた。先に本講座を開いた西東京市では、リタイアした世代を対象に時間帯は平日の午前に設定したが、世田谷区では現役世代も参加できるように、というところで、平日の夜に変更してみた。結果的には現役世代が8、9割で、女性が多かった。受講者の多くは農業や食への強い関心を持っていただけなく、自ら何らかの活動を

「農あるまちづくり講座」で 「真」の准組合員づくり

ど、特段のご協力をいただいた。また、Jカーブが実質事務局を担ってもらうなど、協同組合間連携があつてこそ本講座を成功させることができた。終了してあらためて強く感じるのは、この「農あるまちづくり講座」への消費者・市民のニーズが非常に高いこと、またJAの准組合員対策としてきわめて有効であるといことである。こうした自ら体験農園やコミュニティーセンター等に参画し、農業をつうじてコミュニケーションを求められている皆さんの消費者・市民にJAの准組合員となってもらえば、まさに准組合員は地元農業の応援団となつて一緒に活動する存在となる。JA改革で正組合員と准組合員の比率が逆転していることが問題視されているわけであるが、むしろこうした准組合員とよぶに相応しい消費者・市民をつくらなければ、JAグループあつてJA主導による「農あるまちづくり講座」を展開していくところが必要なのではないか。

「農あるまちづくり講座」を通じて准組合員と正組合員とが交流し、准組合員に体験農園や授産等により農地を開放していくことが、農業の持続性を高めるとともに、地域コミュニティを活性化させ、あらたな地域づくりにつながるっていく。扉を押し広げていきたいものだ。

(農的社会学ゼイン研究所代表)